

Glocal Tenri



6

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.22 No.6 June 2021

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
世俗の立場での布教
／永尾 教昭…………… 1
- ・ 日本語教育と海外伝道 (35)
国際化の中での日本語教育 ⑥
／大内 泰夫…………… 2
- ・ 遺跡からのメッセージ (70)
大和の文化遺産を学ぶ ⑧—古代多胡郡の設立と
石上麻呂
／桑原 久男…………… 3
- ・ 伝道と翻訳—受容と変容の“はざま”で— (29)
仏典翻訳の歴史とその変遷 ⑩
／成田 道広…………… 4
- ・ 音のちから—中国古代の人と音楽 (2)
古代楽人の霊力
／中 純子…………… 5
- ・ コロンビアへの扉—ラテンアメリカの価値観
と教えの伝播— (16)
5. コロンビアの体質 7
／清水 直太郎…………… 6
- ・ ヴァチカン便り (50)
法王のイラク訪問
／山口 英雄…………… 7
- ・ ニューヨーク通信 (9)
リスタート (再始動)・ニューヨーク
／福井 陽一…………… 8
- ・ 思案・試案・私案
「碁」の字表記問題再考 (13)
／八木 三郎…………… 9
- ・ 図書紹介 (122)
岡野彩子著『ボンヘッファーの人間学』
／堀内 みどり…………… 10
- ・ おやさと研究所ニュース…………… 11
2020年度「教学と現代」報告 (金子昭)
／新刊紹介

巻頭言

世俗の立場での布教

おやさと研究所長 永尾教昭 Noriaki Nagao

先月号で、天理教の海外拠点において聖と俗のスペースを分けるべきだと書いたところ、ある教会長から「聖と俗を分けなのが天理教の長所ではないか」とご質問を頂いた。書いたことと矛盾するようだが、筆者はそれについては基本的に同意する。

そもそも在家の形を取る天理教の教会長は、必然的に俗世間に身を置かざるを得ない。筆者も妻とともに4人の子どもを育てたが、彼らが幼い頃は幼稚園の保護者会に出て、スーパーで紙おむつを買うこともあった。信者夫婦の家庭問題を相談しながら、自分たちが夫婦喧嘩をしていることもあったのである。出家であればそういう世俗に身を浸すことも少なく、神の取次者としての威厳や清廉さは外面上は保ちやすいかも知れない。

カトリックや正教会の聖職者は言うまでもなく出家だが、日本では明治以降仏教各派は妻帯が許され、字義通りの出家ではなくなった。天理教も含めて、同じ頃に成立した各宗教も在家だ。ただもともと神官の家系である黒住宗忠、神がかりの5年後には独立の広前を持つに至った出口なお、家業をやめ取次に専念せよと神に命じられた金光大神とは異なり、中山みきは「神のやしろ」となり立教した後も、長らく聖なる場所に鎮座ましますことなく、家庭生活の中にあつた。例えば立教から3年後には流産をしている(『稿本天理教祖伝』34頁)。つまり「神のやしろ」となってからも夫との間に夫婦の関係があつたのだ。さらに20年近く経つた後でも、家計のために家族が糸紡ぎなどの言わば内職をしているのを手伝っている(同39頁)。天理教は、そういう雛形も受け継いでいると思われる。つまり、人としては、教会長は隔絶された世界に生きるのではなく、日常の俗っぽいところに入りその中で教えを説いている。

ただ、空間的な意味となるとどうか。教会が私的な教会長家族の住まいでもあるので、聖と俗が混交するということは言葉を変えれば公と私と混じり合うということになる。神殿は公的な空間であるべきだが、そこに私的な生活が入ることもある。それでも、古くから隣近所との付き合いを重んじプライバシーの保持にあまり拘らない日本人同士(高温多湿気候で、近年はともかく、かつては襖と障子のみで仕切られている日本家屋の影響もあるのだろう)なら、まだ問題は少ないが、欧米人などは他人の私的空間に入ることは大いにためらいがあり、それが神殿だと言われても戸惑うだろう。

海外の天理教の拠点の場合、もちろん個人宅では決してないが、拠点長はじめ専従職員は住み込むという形を取っている。そういう慣習の中でどうしても公と私と混交しやすい。将来的には、海外ではその慣習自体を考える必要もあると思うが、工夫することも必要だろう。

カトリックは出家だが、プロテスタントの牧師は人によっては結婚し家庭も持っている。筆者が知っている、海外のあるプロテスタント教会の場合、同じ敷地内でありながら、礼拝場のすぐ裏に独立して牧師の家があり、礼拝場の入口とは完全に分けて別の入口から入る。そして両者は互いに行き来できない構造になっていた。牧師が礼拝に出るときは、一旦敷地外に出て改めて礼拝場に入るという形になっている。

本誌2020年4月号で、「異文化伝道」ではなく「海外布教」を考えるという意味のことを書いたが、それは、天理教の場合教義や祭儀をどう普遍化していくかという問題以前に、このように世界のいくつかの地域で、日本人や日系人以外の人々にどう天理教に親しんでもらえるかというレベルにいま留まっているからでもある。

国際化の中の日本語教育 ⑥

やさしい日本語

前号で技能実習生の話や多文化共生社会について述べてきたが、これからの時代は「やさしい日本語」に関心が集まるだろうと思われる。『「やさしい日本語」は何を指すか』(庵功雄・イヨンスク・森篤嗣編、ココ出版、2013年)の中で、庵功雄は次のように述べている。

現在、定住外国人の数が増えています。このことの背景にはさまざまな要因が考えられますが、人材の移動のグローバル化と日本社会の少子高齢化および生産年齢人口(15～64歳)の減少傾向がその大きな要因であることは間違いありません。つまり成功の場を海外に求めようとする人の流れと、外国人の力を必要とする日本国内の動きが同じ方向を向いているのです。このように、これからの日本社会を支えていく上で外国人の力がどうしても必要であるとすれば、そのような理由で日本にやってくる外国人が母国でと同じように、日本においても自己実現できることを保証する必要があります。

日本の各自治体でも、多言語による情報提供は以前より進み、英語・中国語・韓国語・ポルトガル語・スペイン語で情報を提供するようになってきて、実際にそれらを目にすることも多くなった。しかし、これらの言語以外の人にはこぼれてしまう。また全国調査で定住外国人が「自分がわかる外国語」として挙げた言語は、日本語(62.6%)英語(44.0%)と、日本語よりむしろ英語の方が低いという結果もある。つまり地域社会において日本人と外国人との間での共通の言語として、「やさしい日本語」が必要になってくるということである。

やさしい日本語の具体例

「やさしい日本語」が実際にどのようなものなのか、少し紹介したい。地方公共団体などから提供されている情報などの公的文章をやさしい日本語に直した例である。

書き換え例1

(原文)

『防犯協会』や『防災センター』という実在する団体・公共機関の名前をかたり、生徒の名前やその友人の電話番号を聞き出す手口が8月10日前後からA市内の小中学校で相次いでいます。

(書き換え文)

『防犯協会』や『防災センター』などの名前を言って、嘘をつきます。それから生徒の名前や友だちの電話番号を聞きます。電話は8月10日ぐらいからA市の小学校・中学校でたくさんありました。(前掲書10頁)

庵功雄は書き換えのポイントとして、「できるだけ、短い文に区切って表現する」「意味的に重要な部分だけを訳す」「文全体の意味を取って必要な部分のみを訳す」「漢語は必要最低限のみ残し、残りは和語に書き換える」と書いているが、筆者も同意することばかりだ。これらは日本語教師であれば、日々、実践していることである。授業で積み上げてきた語彙や文型をわかっているから、それらを駆使し、難しい文章でも学習者に分かるようにかみ砕いて伝えることを日常的にやっていると言える。では日本語教師以外の人にはできないのかと言えば、そんなことはない。上記に挙げたポイントを意識しながら説明することで、

わかりやすい「やさしい日本語」になるのである。多文化共生社会においてはこういった「やさしい日本語」が重要視されるのは間違いのないし、多くの技能実習生が実際に来日している地域社会においても、経験からすでに実践されているのである。

ある福祉施設を訪問して

先日、老人福祉施設を経営されている方から、介護実習する留学生のための日本語学校を開設したいとの相談を受け、実際に訪問してお話を伺った。この連載の中で技能実習や多文化共生社会についても書いてきたこともあり、それらと日本語教育との関連について研究する上で、参考になると思った。筆者自身も親が介護施設にお世話になっていた時期があり、介護施設に親を迎えに行った時に、中国人スタッフもいるということを知り、関心を持っていたが、現場の方々の話を聞く機会などはなかったため、いい機会になった。話を伺って驚いたのだが、自分の想像より、はるかに介護の分野では人材不足が深刻である。求人をかけても応募する人はなく、人手不足で勤務のローテーションを組むにも厳しい状況があると伺った。建物や設備など施設が整ってはいても、そこで実際に働く人材が不足しているというのが現実のようだった。またこれからの時代、団塊の世代が高齢化し、日本は益々、介護の分野を整えていくことが急務なのに、働き手が全く足りていないという状況があり、ここでも外国人に助けてもらわなければならないという現実を知った。新型コロナウィルスの影響で、クラスターを発生させないように神経を使い、医療・介護の世界で働く人たちは疲弊していると聞く。またこのコロナ禍で来日する外国人の数も大幅に減り、現状はかなり厳しいようだ。世界的にパンデミックが収まれば、また来日する外国人も増えるのであろうが、それまでに国は制度をさらに整えていかなければならないのではないだろうか。

技能実習から特定技能へ

2019年4月から外国人労働者の受け入れを拡大する新たな制度として「特定技能」という在留資格が新設された。しかし、技能実習制度と何が違うのか、分かりにくい部分がある。そもそも「技能実習」は「技術移転による国際貢献」が目的であり、帰国後に習得した技能を母国の経済発展に活かしてもらうものである。したがって、受け入れ年数や人数、対象職種の種類がある。それに対して「特定技能」は「労働力の確保」が目的であり、「技能試験・日本語試験」に合格し、特定技能の資格があれば、同分野内で転職も可能になる。また受け入れ人数も「介護」や「建設」の分野以外では制限もない。「特定技能1号」では日本語能力試験N4レベルの合格が必要であるが、N1(難しい)～N5(易しい)までである試験の下から2番目で「基本的な日本語を理解することができる」レベルである。具体的には学習時間数300時間位、語彙数2,000語位、漢字300字位で、筆者が勤める学校では普通の進度のクラスで4月入学に入学して、10月頃にはそのレベルまで進む。日本語能力試験は年に7月と12月の第一日曜日にあるので、12月まで勉強を続ければ十分に合格できるレベルである。つまり上記の「やさしい日本語」で、ある程度の会話ができればということである。外国人は言葉が通じないからできれば避けたいなどとは思わないで、積極的にコミュニケーションを取ってもらいたいと願う。

大和の文化遺産を学ぶ ⑧—古代多胡郡の設立と石上麻呂

天理大学文学部教授
桑原 久男 Hisao Kuwabara

平成7年(1995年)に文化庁が始めた巡回展「発掘された日本列島」は、近年発掘調査された遺跡やそこから出土した注目の遺物などを紹介するもので、第26回となる令和2年度(2020年度)は全国5会場での開催となった。昨年12月、会場となった愛知県一宮市博物館を訪問する機会があり、各時代・各地域の代表的な遺跡・遺物を選びすぐった「日本の自然が育んだ多様な地域文化」、近年注目を集めた7遺跡を取り上げた「新発見考古速報」などの展示を見学することができた。

「新発見考古速報」のなかで、とくに興味深かったのが史跡上野国多胡郡正倉跡(群馬県高崎市)だ。この遺跡は、利根川の支流、鏑川が切り開いた広大な谷の中にあり、かねてから郡衙が存在すると想定されていた。平成23年(2011年)からの発掘調査で、ひときわ高い段丘上の場所から、東西16.8m、南北7.2mの大型建物跡が礎石が整然と並んだ状態で発見され、炭化米や多量の瓦が出土したことから、正倉(税として徴収した稲を保管する倉庫)の中でも格式の高い「法倉」だと考えられた。出土遺物から見ると正倉の創建年代は8世紀前半で、律令国家の税の徴収や地方支配の在り方を考える上で重要であるとして、令和2年(2020年)3月、国の史跡に指定された。巡回展の会場では、正倉跡の出土遺物のほか、正倉跡の北方約350mに位置する多胡碑の実物大模型が展示されていた。



写真1 多胡碑
(高崎市教育委員会提供)

多胡碑とは、古代多胡郡の設置を記念して和銅4年(711年)に建てられた石碑で、笠石・碑身・台石から構成されている。山ノ上碑(681年)、金井沢碑(726年)とともに上野三碑と呼ばれ、それぞれ国の特別史跡に指定されるとともに、平成29年(2017年)10月、ユネスコの「世界の記憶」に登録された。見事な楷書体で多胡碑に刻まれた80字の碑文は、『群馬県史 通史編2』

によると、次のようだ。「弁官符す。上野国の片岡郡・緑野郡・甘良郡から合わせて300戸を多胡郡として設置し、羊に給いて多胡郡と成せ。和銅四年三月九日甲寅に宣る。左中弁・正五位下多治比真人。太政官二品穂積親王、左大臣・正二位石上尊、右大臣・正二位・藤原尊。「羊に給いて」という部分をどう理解するかが難しいが、『続日本紀』でも、和銅4年(711年)3月、上野国の3つの郡から6郷を割いて別に多胡郡を置いたことが記載され、史書と碑文の内容が合致している点が重要だ。郡の設置を命じた朝廷の要人4名の一人として碑文に名前が見える左大臣・正二位石上尊とは、柚之内火葬墓の被葬者の可能性があることを前号の記事で紹介した石上麻呂にはかならない。石上麻呂とはどのような人物だったのだろうか。

石上麻呂が、物部麻呂の名前で初めて史書に登場するのは、天武天皇元年(672年)のこと。壬申の乱の際、大友皇子の従者として最期まで付き添い、敗者の側になったものの、戦後の

朝廷で重用され、天武天皇5年(676年)10月10日、遣新羅使として派遣される。天武天皇13年(684年)、朝臣の姓を賜り、これを契機に物部から石上に改姓し、律令官人氏族への転身をはかったと見られる。持統天皇4年(694年)元旦には、天皇の即位の儀に際して物部麻呂朝臣として大盾を立て、文武天皇4年(700年)には筑紫総領、大宝2年(702年)に大宰帥に任じられた。和銅元年(708年)、石上麻呂が左大臣、藤原不比等が右大臣となり、和銅3年(710年)、平城遷都に際しては旧京(藤原京)の留守を務めた。和銅4年(711年)の多胡碑に左大臣・石上麻呂とともに名前が見える穂積親王は、霊龜元年(715年)に没している。養老元年(717年)、石上麻呂は78歳で没し、深く悼んだ天皇は政務を中断して、長屋王らを弔問のために邸宅に向かわせて従一位を迫贈する。『続日本紀』は、追慕し痛惜しない人はいなかったと記すが、葬地についての記述は見られない。そのゆかりの地に営まれた柚之内火葬墓が石上麻呂の墓地だったとしても不思議はないだろう。副葬された優美な海獣葡萄鏡も、麻呂の身分と経歴を見ればふさわしいものに思われる。

ところで、天理大学附属天理図書館の数多い貴重な書籍や史料のひとつに、奈良時代の公文書・太政官符(重要文化財)がある。宝龜3年(772年)12月19日、古代律令制において二官八省の頂点に位置する太政官が、神祇官に下したこの公文書には、不比等の孫、藤原百川の署名が見える。前年の9月17日、武蔵国入間郡で、租税の米を収めた正倉4棟が焼失した事件について、国司が卜占によってその理由を探ったところ、同地の神社に対する国からの供物がこの頃途絶えているので、土地の神が祟って火を發したとのお告げがあった。調べてみるとそのとおりなので、同地の神社への供物を再開せよ、といった内容だ。このような「神火事件」は、とくに奈良時代後期の東国で頻発したが、その真相は、正倉を管理した郡司や国司による稲の横領とその証拠隠し、政治の乱れにあることが次第に明らかになってゆく。史書や文書等には記録がないが、多胡郡正倉跡で見つかった炭化米は、このような正倉の焼失事件が同地でも発生したことを示しているのかもしれない。

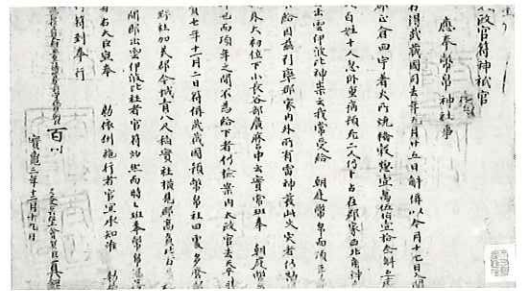


写真2 太政官符(天理大学附属天理図書館)

コロナ禍のなかでの開催となった昨年度の巡回展「発掘された日本列島2020」は、文化庁が「おうちでも楽しめる」解説動画をYouTubeで公開し、現在、視聴回数が34万回を越える人気ぶりだ。多胡碑についても、高崎市が作成したPR動画で現地の様子を知り、歴史的意義について学ぶことができる。現地を訪ね、実物を見るのが一番だが、コロナ禍を奇貨として作成されたこれらの動画は、オンライン授業に限らず、今後も教材として活用できそうだ。

コロナ禍のなかでの開催となった昨年度の巡回展「発掘された日本列島2020」は、文化庁が「おうちでも楽しめる」解説動画をYouTubeで公開し、現在、視聴回数が34万回を越える人気ぶりだ。多胡碑についても、高崎市が作成したPR動画で現地の様子を知り、歴史的意義について学ぶことができる。現地を訪ね、実物を見るのが一番だが、コロナ禍を奇貨として作成されたこれらの動画は、オンライン授業に限らず、今後も教材として活用できそうだ。

仏典翻訳の歴史とその変遷 ⑫

鳩摩羅什一門の活躍

鳩摩羅什は漢訳の過程で多くの漢人門下を育てた。彼に師事した門下の数は三千人ともいわれている。彼らは鳩摩羅什と共に漢訳に従事しつつ、訳場では議論に参加し、それまでの漢訳の不備を認識するようになった。彼らはまた筆受として、鳩摩羅什の口述に対して、より洗練された漢文を施した。漢訳作業を通じて彼らは教理解を深め、中国での仏教受容に貢献した。なかでも高弟の僧肇、道融、道生、僧叡は四聖と称された。

僧肇は若くして鳩摩羅什に師事した。彼は『肇論』を記し、鳩摩羅什がもたらした龍樹の般若教学を、老荘思想の用語を用いて中国的文脈に再解釈し、中国に定着させようとした。彼は『般若無知論』の中で、般若を知る側と知られる側という対立を離れており、般若に智慧はないとした(石井, 2019:72)。僧肇は、般若を一般的な概念知と区別して特殊な認識機能としてとらえ、知と不知の相対性を超越した完全な一切智であるとした。

道融はインドから来華したバラモンとの対論で相手を論破し懺悔させるほど卓越した能力を備えていた(鎌田, 1983:305)。鳩摩羅什は『法華経』訳出の際、道融にその内容を講じさせた。それを聞いた鳩摩羅什は「仏法の興るは、融其人なり」とその内容を絶賛したという。

道生は、「頓悟成仏説」「善不受報」「法身無色論」「仏無浄土論」など、それまでの中国における学説を否定する新しい学説を主張した。鳩摩羅什から空の思想を学んだ道生は、万物の根底に存在する道理、普遍的真理を「理」とし、存在の否定に関して「有」と「無」をそれぞれ別体別異なものとせず、あくまでも「一」なる「理」の顕現であり、その「理」を悟ることによって仏となるとした。彼は仏教概念としての「仏性」を、中国の思想概念である「理」として理解した。この「理」による仏教理解は道家思想に基盤を持つので、道生の思想を格義的であるとする見方もある(伊藤, 1992:187)。彼は諸経典を整理するために、在家信徒のための「善浄法輪」、相手に応じて三乗を説いた「方便法輪」、成熟した者に真実を明かした『法華経』の「真実法輪」、涅槃直前に仏性を説いた『涅槃経』の「無余法輪」にそれぞれ分類した(石井, 2019:78)。経典相互の関係とその位置付けに注目した道生の説は、教相判釈の先駆けとなった。

道生と同じく諸経典の関係に注目した僧叡は『喩疑』を記し、そのなかで、法華、般若、泥洹(涅槃)の三経の相違について独自の論理を展開した。彼は『般若経』は衆生の虚妄を除き、『法華経』は一究竟を開示し、『泥洹経』は仏の真実の教化を明らかにしたのものであるとし、「優劣は人に存し、深淺は其の悟に在る」と述べ、三経の相互の優劣を否定した(鎌田, 1983:301)。実は、この世の一切の事象・事物は空であり、存在しえないと説く『般若経』と、全ての衆生にはみな仏性が宿り、泥洹は永遠不滅であると説く『泥洹経』は内容的には対立しており、相互の矛盾から仏性の解釈と人間の本性に関する論争がしばしば起きていた。多様な経典がランダムに将来され、彼らが随時翻訳され断片的に流布し併存している中国仏教の特殊な状況を僧叡は憂いでいた。彼の著作からは、それぞれの経典

の理解はもとより、それらが説く教理をどのように位置付けて、いかに中国仏教としての網格を示し、体系化していくかに苦心していたかがわかる。中国における仏教の受容と変容の“はざま”には、教えの体系化という断層が垣間見える。僧叡は『喩疑』の中で鳩摩羅什の教えとして次のように記している。

「五十余年にわたる釈尊一代の説法は、みな真実である。だからこそ人びとを益することができる。就中、解脱という真の利益を。(中略)諸経典に教えがさまざまに説かれているのは「随宜」である。すなわちそれぞれの説法は、機根に差がある衆生に応じてなされている。そのために如来は三乗の教えをもって教化したのである。したがって、もしその趣旨を理解するならば、すべての教説は意味ある深い教えとなり、一部に固執し他を否定するなど全くの誤りである。」(堀内, 2010:113-114)

諸経典に通じていた鳩摩羅什は、一様ではない教理の相互関係に対して、経典全体を俯瞰的に捉え、それぞれの経典はその位置付け如何によって真価を発揮するか否かが決まると考えていた。しかるべき位置を与えることによってはじめて諸経典の意味内容を的確に了解でき、一部の経典への偏執から脱却できるとする鳩摩羅什の遠視した経典観に触れ、彼に師事した英才たちは、中国仏教という枠組みを構築し、その中にそれぞれの経典の理解を落とし込む学問的態度を身につけた。

そのような思想的成熟は、漢訳仏典を介して教理が思想として体系的に受容され、仏教が中国的に深化する要因になったと考えられる。その深化は羅什教団とも称される鳩摩羅什一門の漢人訳経僧の尽力によって急速に進んだ。彼らの出身地は様々であり、鳩摩羅什を敬慕し、各地から優秀な人材が長安に集結したことがわかる。彼らは鳩摩羅什の警咳に接し、漢訳作業を通してそれぞれの才能を開花させた。彼らが残した経序や注釈を見ると、鳩摩羅什が翻訳者としてだけでなく、思想家として門下を指導していたことが窺える。伝道と翻訳の関係を考察する上で、訳経という実証的な成果のみならず、彼が訳経を通して多くの門下を育成し、優れた訳経僧を輩出した点は注目に値する。

他の訳経と比較すると、鳩摩羅什の訳経は篤信家であった後秦の王、姚興の手厚い支援のもと進められた国家事業であった点も看過できない。姚興は外護者として鳩摩羅什の活躍に大きな期待を寄せていた。その政治的経済的支援なくしては鳩摩羅什も天賦の才を存分に発揮できず、彼の翻訳もこれほどまでの成果を挙げることはなかっただろう。鳩摩羅什の訳経は、優秀な門下の支えと強力な外護者の存在という好条件に恵まれた、中国仏教史上初の一大事業であったといえる。

[引用文献]

- 伊藤隆寿『中国仏教の批判的研究』大蔵出版、1992年。
鎌田茂雄『中国仏教史第二巻受容期の仏教』東京大学出版会、1983年。
石井公成『東アジア仏教史』岩波書店、2019年。
堀内伸二「羅什三蔵とその弟子の教判論」『新アジア仏教史 06 仏教の東伝と受容』佼成出版社、2010年。

古代楽人の霊力

楽人師延の霊力

古代中国には並外れた霊力をもつ楽人がいたとされている。三皇(伏羲・神農・女媧)・五帝(黄帝・顓頊・帝嚳・堯・舜)という伝説上の皇帝のときにも、皇帝のそば近くに仕える楽人がいたようだ。まず、王子年の『拾遺録』(『太平広記』巻203所収)をみてみよう。

師延は殷の楽人である。伏羲の時代から代々楽人の仕事をとりおこなってきた。師延に至っては、陰陽の働きに詳しく、天体の運行に通曉しており、彼の人となりはついに知られることはなかった。時代はうつりかわり、師延はある時は君に仕え、ある時は在野にあった。黄帝の時代に、音楽を司る官となった。くだって殷の時代となり、三皇五帝の音楽をすべてまとめた。師延が一絃の琴を奏でると地の神々があらわれ、玉律を吹けば天の神々が降臨した。黄帝の時、師延はすでに数百歳だったが、国々の音楽を聴いては、その王朝の興亡の予兆を読み取った。(師延者、殷之楽工也。自庖皇以来、其世遵此職。至師延，精述陰陽，曉明象緯，終莫測其為人。世載遠絶，而或出或隱。在軒轅之世，為司樂之官。及乎殷時，總修三皇五帝之樂。撫一絃之琴則地祇皆升，吹玉律則天神俱降。當軒轅之時，已年數百歲，聽衆國樂聲，以審世代興亡之兆)

『拾遺録』とは、東晋の道士である王嘉(字は子年)が三皇五帝以来の奇怪談を記したもので、それゆえに『拾遺記』とも呼ばれる。東晋は317～419年の間、江南に開かれた王朝であり、当時仏教をつうじてインド起源の神秘物語、譬喩譚、さらに怪奇談がひろがり、それが刺激となって中国でも志怪小説と呼ばれる作品がうまれた。ここに引いたものも、そのなかの一つである。ただ、師延については『韓非子』や『史記』などにもその故事がみえることから、純粋に王嘉の創作というよりも、伝承の記録といえよう。それが事実か否かはまったく別として、楽人の非凡な能力が、どう認識されていたかがここに窺える。

まず、師延は伝説上の黄帝の御代から、殷(BC1600～BC1120)まで生きていたところからして、尋常の人ではないとの前提が示される。さらに師延の優れているのは、自然の理、天体の動きに精通していたことである。彼の人となりは知る由もなくなぞではあるが、人智を極めた者が紡ぎだす音にこそ威力があると言うのであろう。

そのような人並外れた能力をもつからこそまた彼は、三皇・五帝の音楽をまとめあげることができた。その音楽がとりわけ重要なのは、「一絃の琴を奏でると地の神々があらわれ、玉律を吹けば天の神々が降臨」するように、皇帝たちが神々と交流するうえに不可欠なものだと考えられたからであろう。これは、最古の楽官である夔が作り出した「神と人とが和合する」音楽のあり方とも重なる。

さらに続いて、為政者にとって重要なもうひとつの音楽のあり方が記されている。それは、音楽は世情を映し出し、それゆえに、世情の安定や混乱の指標となるというものだ。優れた楽人こそがそれを察知できるとされていたのである。

音楽から世情を読み取る

音楽は、世情をダイレクトに映し出してくれる。その音楽

のあり方を確固たるものとしたのが、次にあげる儒教の經典『礼記』の楽記であろう。『礼記』は前漢において、先秦以来の儀礼についての議論をまとめた書物である。

そもそも音は人の心に生じるものである。内なる感情が動いて、声として形になり、声は文られて音になる。だから治世の音は、安らかで楽しい、その政治が平和であるからだ。乱世の音は、怨みをおび怒気が感じられる、その政治が歪んでいるからだ。亡国の音には、哀しく悲痛な思いがこめられている、その民が困窮しているからだ。声音のありかたは政治と通じているのだ。(凡音者生人心者也。情動於中、故形於声、声成文謂之音。是故治世之音、安以樂、其政和。乱世之音、怨以怒、其政乖。亡国之音、哀以思、其民困。声音之道与政通矣)

音楽が人々の心のありようを映し出すという考えには、いまの我々も頷くところがある。つまりこれは、音楽の本質をひとつの側面からの的確に捉えた言説といえよう。こうして音楽は、深く人心と結びつくゆえに、社会の安定や混乱を示す指標として、時の為政者にとって看過できないものとなっていく。王朝が交代するたびに、まず宮中儀礼の中心となる音楽の整備が急がれるのは、それが世のあり方、ひいては世を治める皇帝の徳までも映し出すとされたからである。そして師延のような楽人こそは、それを聴きとる能力をもつとされた。

世情を変える音楽の力

音楽が世情を映し出す一方で、音楽によって世情を変えられるとも考えられていた。秦始皇帝期に編まれた『呂氏春秋』の「古楽篇」には、伝説上の炎帝(朱襄氏)の楽人土達(したつ)が奏でる音楽の威力が記されている。

音楽の由来は尊く、決して廃することはできない。適切であるときもあるが、過ぎるときもある。正しいときもあるが、乱れているときもある。賢い者はそれによって世を榮えさせるが、愚かな者はそれによって世を亡ぼす。いにしへの世において炎帝(朱襄氏)が天下を治めていた折に、風が強く陽気が蓄積し、万物が散り落ち、実りがなくなってしまった。そこで土達が五絃の瑟を演奏すると、陰気がやってきて、あらゆる生き物は落ち着いてきた。(楽所由来者尚也、必不可廢。有節有侈、有正有淫矣。賢者以昌、不肖者以亡。昔古朱襄氏之治天下也、多風而陽氣畜積、万物散解、果實不成。故土達作為五弦瑟、以来陰氣、以定群生)

楽人土達

が弾いた五絃の瑟はどんな楽器だったのか。それは、伏羲や神農が



『中国音楽史図鑑』(人民音楽出版社 1988年) 22頁より作られたとされる由緒ある楽器であり、古代より琴とならんで重んじられた。写真にあげたように、湖北省の曾侯乙墓(戦国前期のもの)の出土例が、古来用いられた瑟の姿をおぼろげながらも伝えてくれる。陰陽の狂いを調べて、自然を調和させ、世を安定に導く力を、土達の弾く瑟は持っていた。霊力をもつ楽人は、為政者にとって不可欠な存在だったといえるだろう。

5. コロンビアの体質 7

天理教コロンビア出張所長
清水 直太郎 Naotaro Shimizu

前はコロンビア的「個人主義」を述べた。今回はコロンビア人的性格要素の中で、「陽気」と「約束について」を解説していこう。

*陽気 (気持ち・性格の明るさ)

コロンビアは国民がみな陽気であり、明るいということである。その他のラテンアメリカの国民性の中でも「陽気」は存在するが、とくにコロンビア人は、自国に治安問題 (犯罪や殺人の多さ)、ゲリラや武装組織と政府の抗争、誘拐、麻薬問題を抱えているのにもかかわらず、暗い雰囲気の人はい少なく、明るい人の方が圧倒的に多いと感じている。また、世界的に見て「幸福度」も常に上位に位置している。

確かに言えることは、「どんな時でも」陽気であるということなのだ。槇原敬之の歌ではないけれど「僕が僕であるために」陽気である。たとえ内紛が起ころうとも、最近ではコロナウィルスで厳しい都市封鎖の政策の中においても、コロンビア特有の「陽気さ」はなくなる、というか関係がない。その陽気さといっても、どのような陽気さかと言えば「パーティー」(フィエスタ) なのだ。コロンビアはもとより、中南米地域はこのフィエスタ文化が重要な価値観でもある。つまりコロナウィルスが一番喜ぶ「蜜」が大切なのだ。そしてフィエスタに付き物はダンスとアルコール飲料である。

興味深いデータがある。コロンビアにおけるロックダウンは昨年 (2020) 3月25日から始まった。そして空港や国内の交通閉鎖は9月1日まで施行され、現在 (2021年5月) まで断続的に、特に連休・週末には現在もコントロールが行われている。現在は三種類の規制 (身分証番号外出規制、禁酒令、外出禁止令) が週末や連休に発令されている。コロンビアの全国紙 *El Espectador* に昨年4~8月までの5ヵ月間に摘発されたパーティーについて、次のように書かれていた。

この5ヵ月にも満たない時期にカリ、メデジン、バランキージャ、カルタヘナの4都市において7,701件の違法であるフィエスタ (パーティー) が摘発された。これは行政と警察がコロナウィルスまん延防止に対する挑発現象ともとらえられている⁽¹⁾。

警察や行政に対する挑発行為かどうかはともかくとして、コロナ現象のずっと以前から、週末は踊ってお酒を飲んで過ごすのがコロンビアの「陽気」の一つの形、つまり文化なのである。

取り締まりの罰則は厳しい。この4都市での5ヵ月で118,000人が出廷を求められ、罰金は総額1,171億7,500万ペソ⁽²⁾にもなる。実際にはその金額のお金がどうなったかは定かではないが、そういう罪を犯しても陽気にしたい、なりたいたのがコロンビア人気質なのである。平たく言えば何があるかと我慢ができないのかもしれない。

よく言われるのが「踊りに行こう、お酒を飲みに行こう、という誘いを断る人は二種類いる。病人かコロンビア人でないかのどちらかだ⁽³⁾」。

地方によっても「陽気」のやり方というか出し方は違うらしい。地域ごとの陽気の価値観が異なるコロンビアである。一般的に言われているのは、海岸地方の人たち (costeños) は騒がしい、賑

やかな人種ということだ。海岸地方はアフロ系、すなわち黒人系の人種が多く、黒人系=アフロのリズム音楽・ダンス好き=賑やかという構図が一般的である。



パーティーを取り締まる警官
<https://www.elespectador.com/noticias/nacional/las-7701-fiestas-que-han-violado-la-cuarentena-en-cuatro-ciudades/>

またフィエスタの語源でもある宗教儀式において、非カトリック教会の新興キリスト教の行事は、ダンスあり、コンサートありと、その「音量」は大きい。

*約束について

これは国民性かどうかかわからないが、コロンビア人が約束を守るとか守らないとかいうことよりも、自分の人生、生活の中で「優先順位」がすでに確立されているということだ。それが仕事関係であっても、約束したからには何があってもそれを守ることではない、と私は最近気がついてきた。たとえば洗濯機の修理で「明日、午前9時に来ます。よろしく」とお願いして、翌日9時に修理人が来たら、それだけで「すごい、信用できる」となる。最近ではマシンにはなっているものの、普通は9時どころか、その日に来たら良い方、2、3日後の午後3時、自分の都合の良い時間に現れることもある。これも、その個人個人に依るといえるものの、最初のうち (コロンビアに赴任して) は「なぜ時間通りにこなかったのだ?」と詰め寄ったことがあった。その場合、決まって、1) 交通事情 (車がエンコしたとか渋滞とか)、2) 家族の事情 (母親が病気とか子供が云々とか) と必ず言い訳を用意している。つまりコロンビア人にとって一番大事なのはなんと言っても家族なのだ。家族の絆を大切にすることは昨今の日本人どころではない。でも、家族を大切にすることは、その本人しかできず、代替できないことなので、それは正論だと思う。だから、たとえ約束を守らない事で相手に損失を与えたり、無礼になっても、自分の「恥」だとは思わない。

「可能な限り対処します」という伝統的かつ慣用的な言葉は、暗にこちらが「約束は遂行しないな」と分かっている、十分に精一杯手を尽くす、「できるだけやるから」という「弾力性」をつけることによって、相手との関係を維持することも考えられる。

しかしながら、学識者は「この約束を遂行しない現象は、今日のコロンビア社会において根底にある不信感をますます増長させている⁽⁴⁾」と評している。

[参考文献及び URL]

- (1) エル・エスペクトドル紙: <https://www.elespectador.com/noticias/nacional/las-7701-fiestas-que-han-violado-la-cuarentena-en-cuatro-ciudades/>.
- (2) 日本円で約40億円。
- (3) German Puyana García, “¿Cómo somos? Los Colombianos”: 48.
- (4) Germán Puyana Gacía:49.

法王のイラク訪問

大ローマ布教所長

山口 英雄 Hideo Yamaguchi

法王フランチェスコは、33回目となるイタリア国外への司牧の旅を行った。2019年11月の日本訪問について、15カ月ぶりだ。昨年はパンデミックに突入して、予定されていたイタリア国外の司牧の旅は中止されたためである。また、パンデミックの恐ろしさ以外にも、イスラム過激派のテロ攻撃が心配されていた。とくにISIS（イスラム国）のテロ攻撃が心配された。

法王は3月5日にローマを出発し、イラクのバグダッドには同日夕刻に到着した。イラクのムスタファ・アルカディミ首相はじめ、カソリック神父、その他宗教者などによって出迎えられた。イラク訪問は、2代前の聖ヨハネ・パオロ2世法王の念願だった。またフランチェスコ自身も早いうちから、彼の地を訪問したいという望みを持っていた。それがやっと実現したのだ。

法王は以前からイラクの子供の難民を受け入れていた。その子供たちの世話取りを聖エジディオ共同体などに委託していた。ローマ法王のイラク訪問は、カソリック2000年の歴史の上で、現法王が初となった。フランチェスコは到着早々大統領官邸を訪問し、バルハム・サリー大統領に、訪問の目的などを話した。目的は「我々はすべてきょうだいであり、その実践を示す」ことだと述べた。そのあと、「救いの我らの母」大聖堂に移動し、司教、司祭、神父、その他宗教家とともにミサを捧げ、懇談を行った。

イラク3泊4日の滞在で、法王は現地6カ所の訪問、7回の講演、9回の飛行機移動、2回がイラク軍のヘリコプターを使つての移動と、多忙な行程になった。また、それ以外は防弾車を使つて移動した。

到着翌日の3月6日は、南のナジャフに飛んだ。そこはイスラム・シーア派の中心地である。そこには、開祖マホメットの従弟であり、娘婿となったサイード・アリー墓があり、そこに参拝した。また、シーア派のアヤトラであるアル-シスターニ師に面会。二人は親しく語り合った。結論は「きょうだい愛のないところには平和はない」ということだった。法王は全身白の衣装だったが、90歳のアル-シスターニ師は、全身黒の衣装で身を包んでいた。

法王は、ヴァチカンとして、アル-シスターニ師に感謝した。それは同師が、暴力に対して、また過去数年間の大困難に対して、シーク派の共同体とともに、声を大にして、弱者や被抑圧者を救うこと、人間生命の尊厳とイラク国民の統一の大切さを主張したからだ。さらに、アル-シスターニ師は、法王に対して、ISISの残忍な行為を枚挙した。ヴァチカンの報道官マッテオ・ブリーニによれば、法王フランチェスコは次のように語ったという。

アル-シスターニ師は、宗教団体の中における協力と友好関係の大事さを強調されました。それは、相互理解を含め、対話を求めることです。そして、このことはイラクのために良いことであり、宗教界にあつても、当該の地域だけにとどまらず、広く人間世界全体に善となるでしょう。

法王フランチェスコは、ナジャフから少し離れたウルの平原を眺めた。アブラハムの地だ。この2000年以来、この地を初めて目にした法王である。法王はこの場所で、次のように述べている。

ここは我々の父、アブラハムが暮らしていたところです。ここに来るのは我が家に帰ったようなものです。ここで彼は神の呼びかけを聞き、ここから旅に出たのです。それは歴史を変えた出来事でした。いまや、キリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教は同じ兄弟姉妹です。アブラハムがしたように、我々もアブラハムを父として敬いましょう。空を見つめて、地をしっかりと歩いていきましょう。……他の民族に手を差し伸べる民族でなければ、真の平和はありません。……他者を私たちの一人ではないと思うようでは真の平和はないのです。……一方が他方に対する敵対関係を持つことは、分断があるだけです。平和には勝者も敗者もない、兄弟姉妹があるのみです。……平和を求めるにはどこから始めるべきでしょうか？ それは敵としての感じを捨てることから始めるのです。星を見る勇気のある者を、また神を信ずる者を倒そうとする敵はいません。一つの心だけがあります。その心の扉を開き、対立する感情をなくすことです。

3月7日は訪問3日目。法王はヘリコプターでエルビルに飛び、そこから車でカラコシュ、モスルと回った。この地区はカソリックが非常に広まっていたところだ。それが、2014年から2017年にかけて、ISISによって徹底的に破壊された。とくに、カラコシュにあった大聖堂などは破壊された最たるものだ。当時は見る影もなかったが、2017年のISISの敗北以降、復旧作業も進んで、徐々に原状に戻りつつある。ISISの破壊工作が始まる前には、カソリック教徒はおよそ130万人を数えていたが、2017年、ISISの敗北の頃には約40万人に減ってしまった。カラコシュ、モスルの多くの信者たちは国内のあちこちに逃れたり、隣国のシリアやイランに脱出したりした。なかには、レバノン、ヨルダンに逃れた人もいる。ISISとの戦いが終わった現在でも、多くの逃亡者は現地に戻っていない。まだ惨状の残っている地区を車で回った法王は、いかに感じたであろうか。

最後に、法王はモスルの競技場に1万人の人を集め、ミサを行った。パンデミックの時期でもあり、人と人との距離を確保しながらのミサであった。ミサの中で法王は、「今後も生活していくうちに、幾多の困難があるでしょうが、当地から逃げたいはいけません。完全なる復興にはまだ時間がかかりますが、勇気を失わないようにお願いします」と述べた。

3月8日、法王はイラク訪問の旅を終えて、ローマへの帰国の途についた。帰りの飛行機の中で、恒例の記者団との質疑応答となった。その主要な点は次のようなものだった。

今回のイラクへの司牧の旅は長年の念願でしたが、これほど疲れたことはありませんでした。これは、84歳という年齢だけではなく、接触によってパンデミックを広げてはいけないと思っていたし、そのことを神に祈り続けていました。イスラムとの対話は実り多きものでした。アヤトラのアル-シスターニ師は立派な人で、神の子です。シーア派の尊厳を一身に集めていました。私は賢者に会わねばならないという義務感を持ちました。彼は光です。神は世界の所々に賢者を遣わしているようです。

リスタート (再始動)・ニューヨーク

ニューヨーク天理文化協会副主任
福井 陽一 Yoichi Fukui

ニューヨークの街には少しずつ以前のような活気が戻ってきている。文化協会周辺のレストランには若い人たちが集い、笑い声や楽しそうな団欒があちこちで見られるようになってきた。ワクチンの普及が好奏したのか、感染率も急速に低下傾向にあり、そんな状況のなか、各地で新しい取り組みが始まっている。マンハッタンにある総合芸術施設リンカーンセンターでは、中央広場が緑あふれる緑地「グリーン (The Green)」として生まれ変わる。屋外舞台として利用されるとともに市民がリラックスできる場を提供する。ニューヨーク市では7月1日には街を完全にノーマルに戻すと市長が宣言し、通常の10倍の予算を投じ「NYC リアウエイクンズ (目覚め)」との名の下に観光、文化、レストランなどの復活を支援するキャンペーンが発表され、街は再始動、盛り上がりつつある。

和コンサートシリーズ

そんな中、4月25日、文化協会が共催する「和コンサートシリーズ」が再開し、文化協会での演奏がライブストリームで放映された。このシリーズを主宰するの



チャールズ・ナイディック・大島文子夫妻

は、チャールズ・ナイディックさん。彼は『ニューヨーカー』誌において「クラリネットの達人であり、もはやクラリネット奏者の域を超えている」と評されるように、最も魅力的な音楽家の巨匠の一人として世界的に認められている。妻の大島文子さんもクラリネット奏者で、ジュリアード音楽院などで講師をつとめるアメリカで高く評価されている演奏家である。その夫妻が、この文化協会での和シリーズを企画してくれている。

私は、どうしてこれほど世界的に有名な演奏家が、夫婦そろって文化協会の活動に協力されるのか不思議だった。きっかけは、文化協会の活動の普段からの支援者である近所に住む日本人の女性社長さんの紹介であった。しかし、いろいろと話を聞いて後から知ったのは、大島さんはニューヨークでとても熱心に天理教を信仰しながら歯科医院を開業していた、大石昭子さんの姪だった。昭子さんは文化協会が設立される頃、50代の若さで急に出直されたが、30年の時間を経て昭子さんの御霊がナイディック夫妻を文化協会に繋げてくれたのかもしれないと、不思議な縁を感じている。夫妻の文化協会での活躍は、昭子さんもぎっと喜ばれているに違いないと思う。

ニューヨーク市立大学リーマン校との協定

今年のもう一つの楽しみは、ニューヨーク市立大学リーマン校と天理大学の協定が締結され、9月から交換留学が始まることだ。ニューヨークでは初めての天理大学協定校になる。

ニューヨーク市立大学は、11校の4年制大学と6校のコミュニティカレッジ、4校の専門大学院とによって構成されてい



リーマンカレッジ

る全米でも有数の大学群である。リーマン校はニューヨーク市ブロンクスにある4年制大学で、一般にはリーマンカレッジと呼ばれている。国際連合が誕生した1945年に、その本部が置かれた場所としても知られている。日本語教育も熱心に行われており、年に一度開催される日本語能力試験ではニューヨークで唯一の会場に指定されている。広大なキャンパスの中に新旧入り混じった様々な建築スタイルの建物が点在している。

ニューヨーク市内にある大学と協定を結ぶために、いろいろな大学を訪問したり交渉したり文化協会も協力したが、ニューヨーク市の公立大学ということもあり、様々な段階の手続きを経てようやく実現することになった。

キャンパスの中にはメキシコ政府から贈られたオルメカ文明の象徴となっている巨大な顔像のレプリカが飾られている。この巨大な顔像は天理大学附属天理参考館にも飾られているので、不思議な縁を感じ



キャンパスに飾られているオルメカ文明の巨大顔像

る。天理大学からの交換留学が成功し、学生たちがここで世界を知り視野を広げ国際感覚を養う貴重な場として発展してもらいたいと願っている。

文化協会の活動を通して不思議なことを数多く体験した。「不思議は神の働き」と聞いているが、あちらこちらで神様が働かれているように感じている。

文化協会30周年の旬に「感謝と挑戦—米国ニューヨーク世界たすけの道」という30周年記念ビデオを作成し、4月18日教祖誕生祭の日にお供えした。コロナウイルスというパンデミックを乗り越え、新しい時代を迎えようとしているこの旬、30周年を迎えた喜びと感謝の心でニューヨーク管内が一つに纏まって、まずは6年後2027年に迎えるニューヨークセンター創立50周年に向けて、勇んでリスタートしようとしているところである。

「碍」の字表記問題再考 (13)

わが国の国語施策に関する機関として1902年(明治35)に国語調査委員会が創設されている。その後1919年(大正8)に国語調査室、1926年(大正15)の臨時国語調査会、そして1938年(昭和13)には国語審議会など何度か組織改編が行われている。

明治以降の国語施策における政府の方針は、仮名遣いや漢字をわかりやすい簡易なものにすべきという考え方が打ち出され、それに基づいて施策が展開している。

4月号の確認になるが、1908年(明治41)に政府が告示した漢字要覧では、わが国の漢字は中国の清の時代に発刊された『康熙字典』を手本としていることをあげている。しかし、それらの漢字は普段の生活上で用いるものばかりではなく、不要な漢字も含まれていることを指摘している。そこで、国語調査委員会は漢字制限論を打ち出し、中等教育までは簡易な漢字を主として扱うことを決めている。

漢字要覧において、障害に関する表記の漢字として掲載されているのは、「聾、啞、瞽、癩」などである。その後、1919年(大正8)の漢字整理案では「瞽、癩」は省かれ、「聾、啞、盲」の漢字が掲載されている。1923年(大正12)の常用漢字表では、漢字整理案に含まれていた、「聾、啞」の漢字はなく、「盲」だけが載っている。石の部首に掲載された漢字は「石、砂、砲、破、研、硬、硯、碁、碁、碁、碁、碁、碁、碁、碁」の14字である。ここでは「碍」の字は見当たらなかった。

明治以降の漢字施策のなかで「碍」の字が常用漢字表のなかにいつ登場したのか、今回は1945年(昭和20)までのなかで探ってみたい。

常用漢字表 (1931年・昭和6)

この漢字表は臨時国語調査会が1923年(大正12)に発表した常用漢字表を修正したものである。その趣旨は、「国民教育および国民生活における漢字の負担を軽減する」というものであった。当時の日本人の識字能力、識字率はどれぐらいであったのだろうか。国民の兵役義務を定めた徴兵令が1889年(明治22)に制定されているが、徴兵検査の実施と同時に1899年(明治32)から成人男子に対して「壮丁教育程度調査」を行っている。この調査資料によれば当時、成年男子の23.4%は文字を読むことができなかつたと記されている。また昭和初期の報告では83%の人が小学校卒の教育歴であると報告している。成年男子の識字能力の実態を見れば、日常生活での漢字表記はできるだけ簡易なものにしようというのは必然的なことといえる。この常用漢字表においても、固有名詞以外については漢字表にないものは仮名で表記することを定めている。

常用漢字表に含まれる漢字は全部で1,858字である。この表での障害に関する漢字は前述した漢字要覧と同様で変更はなく、石の部首においても「碍」の字はない。

漢字字体整理案 (1938年・昭和13)

当時、人々が表記する漢字の字体が不統一な状況であったことを鑑み、漢字字体整理案では字体を『康熙字典』に倣って整理、修正している。特筆すべきことは、漢字を第1種、第2種とに分けていることである。第1種の漢字とは国定教科書を

はじめとして、一般に使用することを認める漢字として定められたものである。これを見る限り、漢字表記には制限がかけられ、自由に表記することは不可とする時代であったことが読み取れる。第2種は、特別な場合に使用する漢字で主に略字に関するものを定めている。第1種で定められた数は743字、第2種は289字で合計1,032字となっている。

標準漢字表 (1942年・昭和17)

1931年(昭和6)に常用漢字表、そして1938年(昭和13)には漢字字体整理案によってわが国の漢字表記について定めていたが、その使用状況は混乱し、生活上の支障が生じたために国語審議会が文部大臣に答申して新たに定められたものが標準漢字表である。これに関して次のように記されている。

一、本表ハ近來ワガ國ニオイテ漢字ガ無制限ニ使用セラレ、社會生活上少カラヌ不便ガアルノデ、コレヲ整理統制シテ、各官廳オヨビ一般社會ニオイテ使用セラルベキ漢字ノ標準ヲ示シタモノデアル。

一、本表ノ漢字ハ臨時国語調査會発表ノ「常用漢字表」実行ノ状況ニ照シ、時運ノ要求ニ應ジテ選定シタルモノデアル。

人々が無制限に漢字を使用し、それにより生活上で不都合が生じたことが改正の理由のようである。

この漢字表では、漢字の使用度に照らして「常用漢字」「準常用漢字」「特別漢字」の3種類に分けている。常用漢字とは、国民の日常生活に関係が深く、一般の使用度が高いものを表し1,134字を選定している。次に準常用漢字は、常用漢字に比べて日常生活に関係が薄く、一般の使用度が低いものとして1,320字を選定している。そして特別漢字は、皇室典範、帝国憲法、歴代天皇の追号などに使用する漢字として74字、合計2,528字を標準漢字表として定めている。

加えて、同年12月には文部省より「概ネ義務教育ニ於テ習得セシムベキ漢字ノ標準ヲ示シ」として、前述の標準漢字表を微修正した2,669字を義務教育で学ぶ必須の漢字として定めている。

この漢字表での障害に関するものは、口の部首で「啞」、耳の部首で「聾」、犂の部首で「癩、癩」、目の部首で「盲」、そして石の部首で「碍、礙」である。

第2次世界大戦以前は標準漢字として使用されていたとする碍の字をここに確認することができた。しかし、これらの漢字はすべて常用漢字ではなく、日常生活上では関係性が薄く、一般の使用度が低い準常用漢字として扱われている。礙の字については、碍の旧字として掲載されているが、扱いは特別漢字となっている。

[引用・参考資料]

文化庁ホームページ <https://www.bunka.go.jp>

齊藤泰雄「識字能力・識字率の歴史的推移—日本の経験」『国際教育協力論集』広島大学教育開発国際協力研究センター、2012年。

清川郁子「壮丁教育調査」にみる義務制就学の普及—近代日本におけるリテラシーと公教育制度の成立—『教育社会学研究』第51集、慶應義塾大学大学院、1992年。

岡野彩子著

『ボンヘッファーの人間学』 (大阪大学 CO デザインセンター、2020 年)

おやさと研究所主任

堀内 みどり Midori Horiuchi

本書は、岡野彩子さん (大阪大学コミュニケーションデザイン・センター招聘研究員) が大阪大学に提出した博士論文に加筆訂正されたものです。彼女はドイツ・ニュルンベルクに留学していた当時、極右による暴力事件が多発し、移民たちがその対象になっていました。街を歩けば「外国人は出て行け!」という殴り書きがあちこちで見掛けられたということです。そういう時代状況の中、岡野さんは「外国人」留学生として暮らしていたわけです。彼女は留学生活を送る中で、「7月20日事件」(ヒトラー暗殺・クーデター計画)を知り、この計画に関わった少なからずの人が、倫理的・宗教的理由から抵抗を行ったことも知りました。その中の一人がディートリヒ・ボンヘッファー (1906～1945、ルター派の神学者・牧師、フロッセンビュルク強制収容所で刑死)で、彼は獄中から非合法的手段で運び出された書簡などを残しました。岡野さんは、次のように述べています。

絶滅に追いやられるユダヤ人の苦難を目の前にして、牧師でありながら最高支配者殺しに加担する決意に至るまでにはどのような思索がなされたのでしょうか。とくに私の心に掛かったのは、彼が獄中で綴った書簡に現れる「キリスト者であることは、ただ人間であることだ」という言葉でした。ナチス・ドイツという国家の枠組みを超えて行為にいたったこの人物にとって、「ただ人間であること」とはいかなることだったのでしょうか。その言葉の意味を知りたい一心で、私はこのテーマに取り組むことを決めました。

こうして、岡野さんはボンヘッファーの言う「ただ人間であること」を知るための研究に取り組み、そして、私たちは本書を通して、その成果を知ることができます。

本書の「はじめに」では、ボンヘッファーの生涯における三時期区分と時代背景が紹介され、彼の39年間とその時代について述べられています。さらに、ボンヘッファー研究史について言及。簡潔ではありながら、丁寧な解説となっています。そうして、読者は、「ただ人間であること」を考えていくための準備を整えることができます。

序章において、「本書の目的・方法・構成」が示されます。その中で、岡野さんは「本書の主たる目的は、ボンヘッファーの思想を一時代精神の先駆者という先入観からも、また教義学的な枠からも解き放ち、人間学的な視点から再解釈することにあります。彼の人間学の特質を取り出すだけでなく、倫理的・他者論的関心から、その人間学が持つ今日的意義を明らかにすることを目指しています。」と述べています。そして、彼の「私は何ものか」という問いを引用します。この問いを詩として、独房の中で書き記し、「私は本当に、人びとがいうような者だろうか。／それとも、私自身が知っているだけの者に過ぎないのだろうか。」「私は何ものか。後者か、それとも前者か。／今日は後者で、明日は前者か。／あるいは同時にその両方か。」と繰り返し問い続けます。これについて、岡野さんは「そこに自己不統一という経験があったからでしょう。それは彼にとって、神という根源から離反した墮罪後の人間が巻き込まれた<分裂>状態にあることを意味しました。彼の人間学は、この状態を克服し、いかに統一された<全体的な生>を生きるかという問いと、つねに関わっています。」と

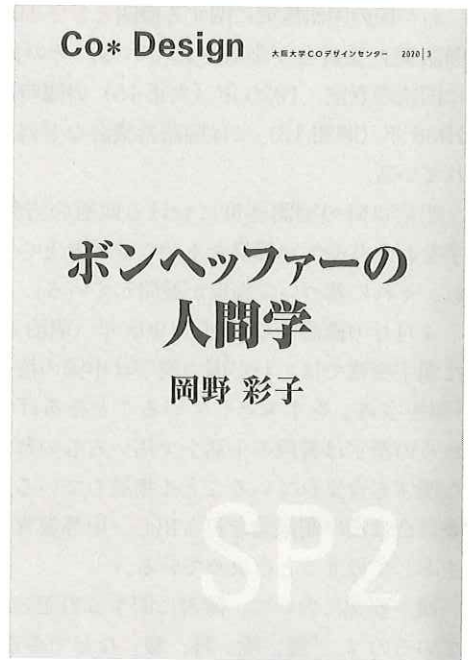
述べています。こうした問題意識を根底に、本書は構成されています。

本書は、大きく3章から成り、それぞれを独立した論文として読み進めることも可能ですが、序章から順に読むことによって、「ボンヘッファーの人間学」を今日において明らかにしたいという著者の意図がはっきりしてき

ます。キリスト者であるボンヘッファーの「自己」なるものへの問いを出発点とし、その問いが内含する人間存在そのものを現代に生きる人々に問いかけているように思われました。「人間学」としてまとめあげることで、神 (絶対者、超越した者、大いなる者) と人間との関係、救済の内実、良心と規範・法に関わるテーマがダイナミックに問われていきます。これらの問いを受けて、では、今日の時代において「人間学」はどう私たちに関わっているのか、が議論されます。そして「ただ人間であること」が最後に論じられるのです。

本書の構成は以下の通りです。

- はじめに
- 序章
- 第1章 限界・境界 (Grenze) から見るボンヘッファーの人間学
 - はじめに
 - 第1節 限界・境界とは何であるか
 - 第2節 限界からの人間の自己理解
 - 第3節 限界・境界を持つものとしての人間
 - むすび
- 第2章 ボンヘッファーの人間学における良心論
 - はじめに
 - 第1節 良心の語義的考察
 - 第2節 ボンヘッファーの良心概念の歴史的概観
 - 第3節 法と良心
 - むすび
- 第3章 ボンヘッファーの<成人した世界>における人間学
 - はじめに
 - 第1節 世俗化の議論とボンヘッファー
 - 第2節 ボンヘッファーの<成人した世界>
 - 第3節 ボンヘッファーの宗教批判
 - 第4節 ただ人間であること
 - むすび
- あとがき
- 文献一覧



2020年度「教学と現代」報告 「佐藤『元の理』学の世界」
金子 昭

2020年度の「教学と現代」は、テーマを「新型コロナウイルス時代の天理教の教えと実践」として3月28日に開催した。今回はコロナ禍のために初めてYouTube配信という形を取った。

堀内みどり主任の開会挨拶の後、企画担当者として私（金子昭）が趣旨説明を行った。

最初に、天理大学長でもある永尾教昭所長が「一れつきょうだいの教え—天理大学の事例をもとに—」と題して基調講演。昨年（2020年）8月の本学ラグビー部員集団感染問題解決の陣頭に立って取り組んできた体験を踏まえて、人類がみな兄弟姉妹であるという教えを心に治めることの大切さを強調した。

集団感染の発生後、天理大生がアルバイトを断られたり、教育実習の受け入れを拒否されたりする事案が生じ、大学として記者会見を開いた。その結果、市民や卒業生から激励の電話があり、教育実習生も全員受け入れられるようになるなど、状況が変化した。その背景には、新型コロナウイルスという未知なものへの恐怖や心配があったと、永尾所長は指摘。また一方では、「自分が受け入れ先の人の立場だったら」ということも考えた時、相手先を一方的に断罪するべきではなく、事実を丁寧に説明して一緒になって問題解決を進めたいとも述べた。

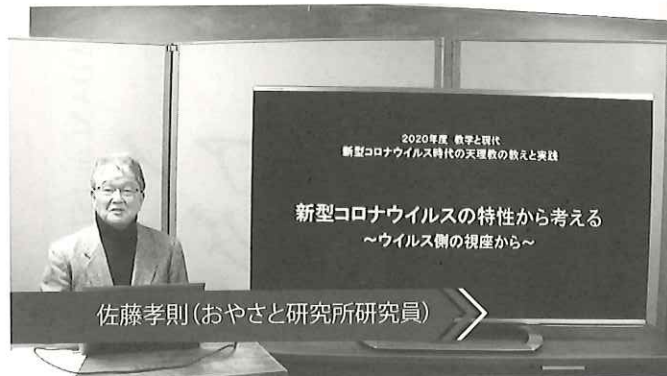
その上で、差別や偏見をなくすためには、「教育の力」に加えて「信仰の力」も必要であると主張。「信仰の力」とは、人間の知恵や力を超えた存在（天理教で言えば親神）への畏敬の念を持つことである。天理教には、人類はみな兄弟姉妹という教えがあり、我々が真にこの教えを体得できたならば、互いの相違を受け入れ、差別や偏見を乗り越えることができると締めくくった。



【永尾教昭所長・基調講演「一れつきょうだいの教え」】

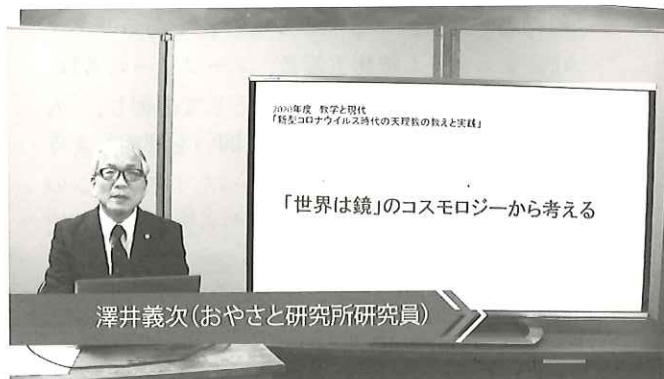
基調講演の後、佐藤孝則研究員が「新型コロナウイルスの特性から考える」と題して、生命科学の視座から発題を行った。佐藤研究員は、新型コロナウイルス感染拡大から1年経ち、ウイルス変異株などの最新情報を踏まえて、感染防止対策が必要であると述べる一方で、ウイルスそのものについての見方を変えるべきことについても主張。ウイルスが「変異」する意図は、自らの命を繋いでいこうとする必死の戦術であって、人類を根絶しようという戦略ではない。そもそもヒトのDNAの8%はウイルスの遺伝子であること、またそのような内在性ウイルスには人体に有益な作用もあることを示した。とくにヒトはウイ

ルスから遺伝子を受け取ったことにより、出産の時の胎盤を獲得し、「をびや許し」を受け取ることができた。このような点を踏まえて、佐藤研究員は、「八千八度の生まれ変わり」の過程における人類とウイルスの共進化について言及した。



【佐藤孝則研究員・発題「新型コロナウイルスの特性」】

引き続き、澤井義次研究員が『「世界は鏡」のコスモロジーから考える』と題して、天理教学の視座から発題を行った。澤井研究員は、親神のご守護の理という視座から捉えれば、人間身の内と世界は、「二つ一つ」の関係において本質的につながり合っていることを指摘。我々人間は親神を「をや」と仰ぐ「一れつ兄弟姉妹」として、互い立て合いたすけ合う関係にある。「世界は鏡」のコスモロジーにおいては、親神が世界に生起する様々な出来事を「鏡」として、我々一人ひとりの心が映されている。それゆえ、新型コロナウイルスの感染拡大を乗り越えるためには、一人ひとりが親神のご守護によって生かされて生きていることの喜びをもって、親神の親心を自らの心に鮮やかに映すことができるよう、自らの心の「鏡」を磨いて心を澄ますことが大切である。さらには、「人をたすける心」になって、親神の思召に適った本来の生き方を身の周りや世界へと映していくことが求められると、澤井研究員は締めくくった。



【澤井義次研究員・発題『「世界は鏡」のコスモロジー】】

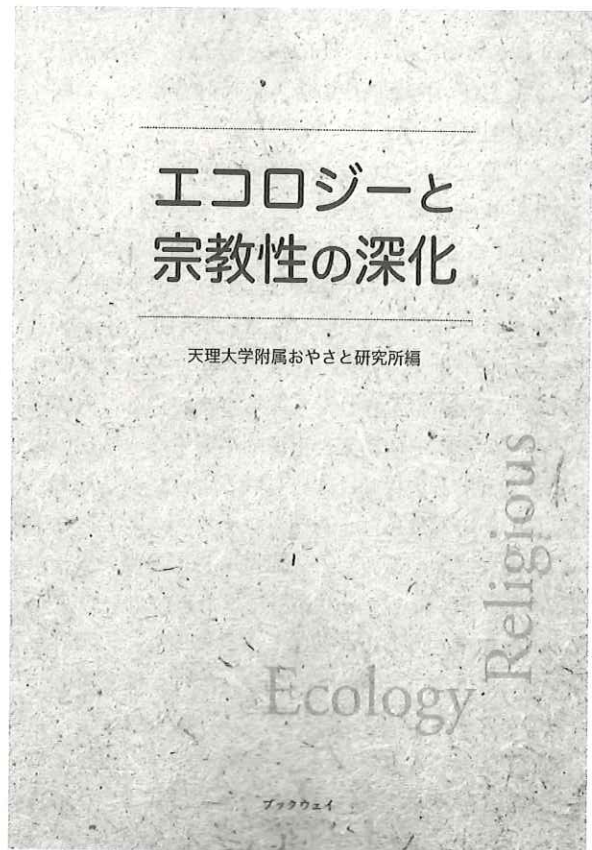
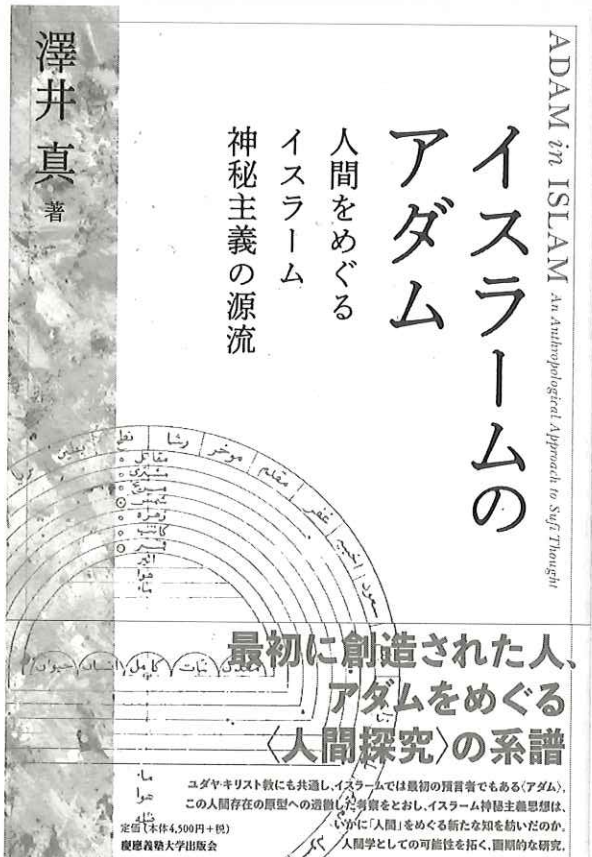
最後に、私（金子昭）が総括を述べた。このコロナ禍を終息させる鍵として、科学リテラシーを重視した信仰の重要性、親神の試練を明るく受け取ることの大切さ、そして天理教者の生き方として「優しい心」「人をたすける心」の必要性があると指摘した。このテーマについては、思案していかなければならないことが数多くあるが、今回の講座の内容が視聴者の信仰的思案の参考になることを願っている。

なお、今回の講座は録画配信しているので、おやさと研究所のホームページから視聴できる。

新刊紹介

澤井真『イスラームのアダム—人間をめぐる
イスラーム神秘主義の源流』（慶應義塾大学出版
会、2020年）

天理大学附属おやさと研究所編『エコロジーと
宗教性の深化』（学術研究出版、2021年）



本書は、おやさと研究所の澤井真研究員による著作。

ユダヤ・キリスト教にも共通し、イスラームでは神に創造された「最初の人間」であるだけでなく、「最初の預言者」として重要な存在である「アダム」。イスラーム神秘主義者、スーフィーたちは、アダムを人間存在の原型・理想として把握し、「人間とは何か？」という実存的な問いを解明しようとした。これまで顧みられなかったイスラームの「アダム」に「人間学」の視点から迫る、画期的な研究。

（慶應義塾大学出版会ホームページより <https://www.keio-up.co.jp/np/isbn/9784766427127/>）

本書は、天理大学おやさと研究所が平成24～26年度にかけて、全12回にわたって実施した「宗教と環境」研究会の内容をまとめたものである。この研究会は、同研究所天理自然・人間環境学研究室が「『環境問題における宗教者の果たすべき役割』に関する研究」の一環として実施したものであり、宗教と環境との係わりあい、宗教者として環境問題にどのように取り組んでいくのか、また、実際に環境はどのように変化しているのかなどを考えるきっかけになることを願っている。

（学術研究出版/ブックウェイの電子書店ホームページより <https://contento.jp/store/bookway/Product/Detail/Code/J0010380BK0111812001/>）

グローバル天理

第22巻 第6号（通巻258号）

2021年（令和3年）6月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 永尾教昭

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan